

『撰集抄』における清僧意識

沼 波 政 保

一 問題提起——清僧讚美

『撰集抄』は周知の如く鎌倉初期に成立した仏教説話集であるが、その主張するものは遁世の姿であることが、すでに田村円澄氏や伊藤博之氏ら先覚の方たちによって明らかにされている。^①すなわち『撰集抄』は、浄土念仏・阿弥陀信仰が基盤となってはいるが、その反面、摩訶止観や唯識の文もみられ、観音・地藏・不動への信仰、さらに神祇信仰をも含んでおり、そのような本書が強調しようとしているのは、教理的に唯一の思想ではなく、遁世の姿である。その遁世について、教理的面によって説明するものは少なく、大部分は遁世する清僧^②をただただ讚美するのみである。たとえば、

- ・ 此事、げに思ひ出ずに、涙のいたく落ちまさりて、書きのべん筆のたてども見えわかずにこそ。^③（三ノ一）
 - ・ 此人の、思ひとりてさまをかへ、すみなれし里をはなれて流浪し給ひけん、貴さやるかたなく侍り。（四ノ一）
- といった調子で、厳しい自己否定の上に立つ隠栖籠居の僧や抖擻修行の僧を、隠徳の清僧として涙を流さんばかり

に讃め称えている。そして、それは、両氏も述べられているように、先の時代に隠徳のために放浪しつつ仏道修行し、『撰集抄』当時の人々の間にもすでに清僧として知れわたっていた玄寶を、その理想像としてしているのである。

しかし、本書は、そのように清僧を讃美しながら、反面、俗的一面がみられるのも、また事実である。ところがこの世俗的な面と清僧を讃美する面とは、互いに矛盾するものであるといわざるをえない。もちろん、法然・親鸞らの立場からいえば、この両者は矛盾するものではないが、法然・親鸞以前の仏教界では、相容れないものと考えられていたことは明らかである。果して、この両面はどのような関わりをもっているのであろうか。

以下、『撰集抄』の俗的側面を明らかにしつつ、それが本書の清僧意識とどのような関わりを持つのか、また、その関わりは何を意味するのかを論じてみたい。

二 俗 的 側 面

まず、本書の世俗的な面について、三点からみてみたい。

一

第一点は、本書に描かれている僧はひじりであるという点である。

本書に描かれている僧は、

- ・ 着物は菰わらをもいとはず身にまとひて（五ノ五）
- ・ 今は諸国流浪の乞食として（九ノ一一）

などと、乞食の如き姿をしていると記されているが、その中にも具体的な姿がうかがわれる。すなわち、「袖もなき帷」(三ノ九)や「麻の衣」(四ノ一)を着、「ひがさ」(三ノ八)をかぶり、「本尊持経ばかり」を納めた「笈」(二ノ一)を背負い、「鈴といふ物」(三ノ二)をふり、「さゝら」(五ノ一三)をすって、「歌」(同上)を口ずさんだり、念仏を唱えて、廻国の旅をし、隠栖している。そして彼らは、井戸を掘ったり(七ノ五)、船頭となったり(五ノ一)、また造寺(七ノ八)といった社会的・仏教的作善しており、中にはその為の勸進を記す箇所(五ノ五・七ノ八)もみられる。また、民衆を教化し念仏を勧めている(七ノ三・二ノ二)。勸進とか民衆教化には、当然、唱導ということを考えねばならないが、本書にはその唱導のにおいもうかがわれる。^④さらに、死骸に出会えば供養し、時にはその遺骨を高野へ運んでいる(六ノ八・六ノ五)。以上のような、僧の服装・持物・行動の例は、本書の他所にも多くみられるが、煩鎖になることを避けて、今は一々指摘しない。

このような僧は、本書でも「聖」・「聖人」・「上人」と呼ばれているように、ひじりと呼ばれた人々である。このことは、本書にみられる地名をみても、高野山やその別所をはじめ、興福寺・長谷寺・東山・西山・大原・小倉山のふもと・雲林院・雲居寺・葛城山のふもと・熊野・箕尾・書写山等々、ひじりの多く住んだ別所や往來のあった寺社^⑤などが多いことから裏付けられる。また、説話の場所がほとんど全国にわたっていることも、話の蒐集段階に勸進聖が関わっていたことを推測させる。

また、結縁引接の思想がうかがわれるのも注目される。たとえば、

・しかれば、おなじ夢の中のおそびにも、新旧のかしこきあとを撰びもとめける言の葉を書きあつめ、『撰集抄』

と名づけて、座の右に置いて、一筋に知識にたのみむとなり。(序)

と最初に述べ、最後では

・遠くつたへ聞き、ちかく耳にふれしむかしの賢きあとを、まのあたり見侍りし中に、いみじき人々を書き載せて、且はかの人々のごとくならんと欣求し、且はこれ閑居の友にせんとして、九の巻にしろし載せ侍り。(跋)

と、さらに、結縁の志を色濃く述べている。これは、序や跋のみならず諸所にみられ、往生人(一ノ二・六ノ八)やその絵像(三ノ八・七ノ七)、さらには貴僧が詠んだ和歌(八ノ三二)や文章(二ノ二)等々、あらゆるものに結縁し、自らも引接されることを願っている。この結縁思想は先の時代の往生伝にもみられることではあるが、五来重博士によると、この結縁思想に関して、平安末期から鎌倉期にかけての勸進聖は良忍以来の融通念仏であったらしい^⑤のことであり、本書の時代と併せ考えるに、その意味するところは明らかであろう。

さらに、大寺にあって僧綱の高位にあることを批判している。

・墨染のたもとに身をやつし、念珠を手にくぐらするも、詮はたゞ、人に帰依せられて世をすぎむとのほかりごと、あるひは、極位極官をきはめて公家の梵筵につらなり、三千の禪徒にいつかれんと思へるも、名利の二をなれず。此理をしらざる類は申におよばず、唯識止観に眼をさらし、法文の至理をわきまへ侍るほどの人たち、知りながらすて侍らで、生死の海にたゞよひ給ふぞかし。(一ノ一)

同様の批判は一ノ八や三ノ五をはじめ諸所にみられる。この高僧としての地位を断ちきっている点は、教団内部の腐敗墮落も一因であろうが、それよりも、大寺から離れて野に在る僧をめざしており、本書に描かれている僧が、

大寺からの出奔、すなわち再出家した僧も含めて、ひじりと呼ばれる人々であったことから考えれば、それは僧綱の面に無縁であったひじりの立場として当然のことであろう。

勸進聖として有名で『今昔』までの説話集や往生伝のほとんどに顔をみせる行基が、本書には主人公としてどこかその名すら出てこないことは、『発心集』や『閑居友』にもみられないことから、『撰集抄』当時すでに高僧として受け取られていたためとも考えられるが、それにもまして、本書の作者には、行基が民衆の中にあつて活躍しながらやがて菩薩という官寺仏教の最高位の僧となったことへの批判的な眼があるのかもしれない。

ともかくも、この高位高僧を批判するのは、隱徳僧や無名のひじりが主人公となっている話が多いことにも合致し、それはすなわち、全国をわたり歩き名も残さず路傍に死んでいった勸進聖・念仏聖の最も主張したい点の一つであつたであろう。勸進聖でもあつた明遍の言葉にも、

・出家遁世の本意は、道のほとり野辺の間にて死せんことを期したりしぞかし。(『一言芳談』)
とある如くに彼らは考えて、全国を廻り歩いたのである。

以上、『撰集抄』の叙述の吟味によって、本書に描かれている僧はひじりと呼ばれた人々であり、中でも勸進聖の色彩の濃いことを知りうる。作者が全国諸所を歩き出会つた僧の清僧ぶりを描くという本書の形式も、この点を裏付けるものを有していようし、本書が仮托したとされる西行が勸進に携わつた人物であることも興味を引く。しかも、

・以往、ある聖ともなひ侍りて、越路の方へ越え侍りき。(三ノ一)

・治承二年長月の此、ある聖ともなひて、西の国へおもむきしに、……(中略)……ある聖とうち語りて

(五ノ一二)

・ある友だちの聖ともるともに(五ノ一五)

などとみえるところから、作者の周辺にもひじりといわれた人々がいたことも明らかであり、本書の成立に彼らが強く関わっていたことを物語っていよう。

しかし、ひじりは一面ではどうしても世俗との関わりを断つことが困難であったことは、すでに諸氏の御高論によつて明らかであり、中でも念仏聖・勸進聖は一般に俗ひじりであった。彼らの糧米一つをとつてみても、

・とき／＼里に出て、たもとをひろげて物を乞うては、山中に入り／＼ぞし給へりける。(五ノ九)

・里に出て物をこひて命をつぎ、人につかへて身をたすくはかりごとをなんしつゝ、世をわたり侍りけるとかや。(七ノ三)

などとみられるように、民衆との接触によらねばならなかったものであり、ひじりという立場はどうしても世俗的な面と重なる部分を持たざるをえなかったのである。

二

第二に発心出家の動機をみると、妻・愛人(一ノ五・四ノ四)や母(四ノ一・四ノ二)子(五ノ十)との死別をはじめ、妻のヒステリー(五ノ二)や借金で首がまわらなくなって(三ノ九)、さらに、男に捨てられて(三ノ三)・他人に土地をとられて(一ノ二)・犬が飯のとりあいをするのを見て(五ノ三)など、様々な理由によつ

て発心し出家している。もちろん、中には日ごろから道心深くして出家した話もあるが、そのような出家は『今昔』等に比して極めて少なく、しかもそれは、例えば死別による発心出家でも、悲しみに出会ったことを機縁として無常を悟っての出家ではなく、多くは衝動的である。

そのように一時的な感情で出家へと突っ走ってしまったては、道心のさめる時もやがて来るであろうし、また仏道修行がきちんと行われたとは考えられない。事実、本書にもそのような叙述がみられる。

・われらがなまじひに家を出でて、衣はそめぬれど、はか／＼しき信心をもおこさず、み山に思ひすます事もなく、年のいたづらにたけぬる。そゞろに悲しく侍り。(二ノ六)

・(女院に死別し出家したが)なにのつとめをすべしとも思ひさだめ侍らで、たどりありき侍しほどに

(六ノ一一)

前者は作者の反省述懐の文であり、多少の謙遜もあろうが、ひじりという点から考えれば、このようなことも当然ありうるわけである。後者は、一時の悲しみから出て出家したものの、どうしてよいかわからず、まさに右往左往の体である。

このように、衝動的に出家しても到底道心を堅固に保てるはずもなかったものであり、そのような発心者はおのずと俗事俗縁と関わりを持つのである。

三

第三に、本書には僧が世俗と関わる話がみられる。よい例が、西行が妻と再会する話(九ノ十)である。長谷寺

で、今は尼となっている妻に会うのだが、妻が今は「高野のおく天野の別所にすみ侍る也」と言うのに対して、西行は始めて聞いたような口ぶりである。また、六ノ三では西行とおぼしき主人公が「契り結びし女は飾りおろして、かやうの高野別所とかやに住み侍り。」と、とぼけている。この別所も天野と推定されるが、天野は高野山との往来も激しく、妻を天野におくひじりの多かつたことは、『発心集』第一「高野^ノ辺^ノ上人^ニ偽^ニ儲^ニ妻^ニ女^ニ事^ヲ」や『盛衰記』の灌口入道と横笛の話によってもわかるのであり、西行が妻を天野においていたことの真偽はともかくとして、高野聖でもあった西行が、天野がいかなる場所であつたかを知らなかつたはずはなかるう。

そのほか、本書には、後に立派な往生人となつた顕基が出家後までも息子のことを気にかける話（四ノ五）、江口柱本で、遊女であつた尼と連歌し「さも恋しき江口の尼哉」といったひじり（五ノ一一）、遊女に宿をかりる話（九ノ八）、魚鳥をも食う僧（五ノ五）等々、僧の世俗的な面を語る話が多い。

このような話は、例えば性空上人が遊女に生身の普賢菩薩をみる話（六ノ十）のように、道心をさらに固める契機となるような話もみえるが、先にふれた顕基の話において、

・（大原に閑居する顕基に結縁を求めて訪れた宇治の大殿に対して）「子息にて侍る俊実は、不覺の物にてなん侍り。」とばかり（顕基は）申されけり。世を捨て給へど、恩・愛・の・道・の・あ・は・れ・さ・は、俊実卿を見捨てさせ給ふなと申されけるにこそ。（四ノ五）

と述べるように、僧の世俗との関わりを述べる話の多くは、人情とか情愛といったことを述べるものであり、否定もしなければ肯定もせず淡々とふれており、世俗と関わるようなことに対して罪悪観はない。

さらに、瞻西上人や浄蔵など、他書に世俗的一面のみえる僧たちも主人公として描かれている。瞻西については『今物語』に

・京極太政大臣と聞えける人、いまだ位浅かりける程に、雲居寺の程を通られけるに、

ひじりのやをばめかくしにふけ

といはせて、車を早くやらせけるに、雑色の走り返るうしろに、小法師を走らせて、

あめの下にもりてきこゆることもあり

といはせたりける。其程の早さ、けしからざりけり。

とあるように、彼が妻帯していたことは天下周知のことであつたらしい。浄蔵については、『大和物語』や『今昔』三十ノ三に、のうさんの君と恋をしたり、近江守中興が帝に奉ろうと育てた娘に験者として通ううちに恋し、わがものとしてしまう話がみられるが、浄蔵ほどの人物ならばこのような話も流布していたであろう。そのような僧が本書においては、主人公の清僧として登場しているのである。

すなわち、本書に登場する僧には、無名の僧も含めて、世俗との関わりを持った僧が多いのである。

以上三点から『撰集抄』の世俗的一面をみてきたわけであるが、このように、本書は俗事俗縁を断ちひたすら求道にいそしむ清僧の遁世の姿を主張しながら、一面では極めて世俗的な面がうかがわれるのである。

三 二律背反性の意味するもの

如上の『撰集抄』の俗的側面の考察によって、本書にみられる僧がひじりと呼ばれた人々であることが明らかになったと思うが、ひじりはその性格上、世俗との関わりを避けて通ることは不可能に近かったのであり、従って、本書の叙述を吟味することによって世俗的な面を見出しうるのも、また当然のことであろう。しかし、そのような俗的側面がみられる本書が、一方では厳しいまでの清僧を求めていることは、矛盾することであるといわざるをえない。果して、清僧意識と俗的側面の、二律背反ともいべき両面は、どのような関わりを持ち、何を意味するものであろうか。

一

この、いわゆる二律背反的な両者を内包している『撰集抄』は、果して何を願い求めたのであろうか。ここで考へねばならないのは、作者は世俗的な面について述べながらも、主張しているのはあくまでも清僧的な面であることである。ある人物について、話を進めるにあたって世俗的な面を叙述に利用しながらも、その骨子はその人物の清僧的な面なのである。

例えば廻国の旅について、作者は隠徳のための流浪であるにとらえる。自らの徳をかくし他人にわずらわされることなしに修行できる身となるためのものであると主張する。しかし、文章は、先にみた如く、その端々から勧進の旅の色彩の濃いものとなっていることを知りうる。すなわち、見聞した話を作者の理想とする清僧の行為、つま

り隠徳のためのものであると主張しながらも、自分の周囲もしくは自分自身がおかれているひじりの姿をもって描いたのである。ひじりの姿をもって描いたことは、それ以外に方法がなかったのか、それとも積極的にひじりの姿を通して描いたのか速断はできないが、遁世する僧もひじりと呼ばれた人々であり、彼らよりも世俗に近い立場にはいたがやはりひじりと呼ばれる立場の側に作者がいたこともあって、偽悪の行為にひじりの現実の姿をダブらせて清僧を主張するのである。それは自己弁護にもみえるが、それよりもやはり自らの理想とする僧の姿を述べたのであろう。

二

すなわち、『撰集抄』の作者は、もちろん、詩文や和歌を引用し地の文にまでも採り入れていることなどから、かなり教養のある人物であつたろうとは思われるが、しかしまた、ひじりという立場にいたことは如上の考察で明らかであり、ひじり、それも俗ひじりもしくはそれに近い立場に身を置きながらも、清僧としての遁世聖を願ひ求めていたのである。従つて、

・百千万の仏を供養し奉りてもよしなし。心一澄まずば、いたづらにや施さん。たゞ夢をさます心のみこそ、まことの菩提ならぬ。仏をつくり堂をたてんよりも、心を法界にすまさんこそ、げにあらまほしくも侍れ。

(五ノ九)

と、造仏や造寺造塔（それには、当然、経済的勧進が必要である。）よりも心を清澄に保つことの重要さを説くのである。

このように考えてくると、清僧を求める結果、経済的勸進をしていない玄賓がその最高規範となったことは、当然の帰結であろう。

すなわち、私は、本書の二律背反的な清俗両面を、世俗的な面との関わりを断ちきれないひじりとしての宿命を背負った現実にあって、理想として清僧を求めた結果によるものであると考えるのである。本書が清僧をただただ讚美するのは、決して自身がそうであるのではなく、それは受容者の立場を物語るものである。

しかも、世俗的な面に対しても、その口ぶりに否定的な態度がうかがわれないのは、前にも少しふれた通りである。決して世俗性を否定しざる意図はない。すなわち、俗事は俗事として淡々と述べ、否定とも肯定とも、りきんでいおうとはしていない。それよりも、その中で心を清澄なものとして保とうと考えているのである。

もちろん、道心なくしての信仰は成立しえないわけであるが、別表に示したような、機械的な数字の比較をみて、発心譚の増加・往生譚の減少・往生の証明の減少といった点で、多くの善根を積み霊験・奇瑞を望み往生を願う先の時代の信仰と異なり、道心重視へと変化していることを如実に物語っている。作者も、

・詮はまことの道心侍らば、修門は何にて侍りなん。……（中略）……いかなる善も、只心によるべきとぞ覚え侍るめり。（一ノ五）

と道心の重要なことを述べている。

もちろん、心を重視するとはいっても、法然・親鸞のような徹底したものはみられない。しかし、当時の宗教界を考えあわせるに、その中において信仰心を重視しようとする萌芽がみられることは、注目に値しよう。

この道心を重視するということは、作者自身がひじりという大寺におけるエリートコースとは異なった立場であり、教理的・学問的面に対して否定的もしくは弱い立場にあったために、どうしても心に重点が置かれがちであることや、聖道門の中における浄土教から浄土門として聖道門に對置する浄土教への流れ、さらに、それら新仏教に對する天台の自己改造（つまり、消極的には自らを浄土教化し、積極的には四重興廢^①の教判を強調する。）や、真言の、民衆的念仏を民衆に滲透させる等の旧仏教の動きの中であってその影響を受けたこと、さらに末世意識^②も手伝っていることも否めない。しかし、それよりも、その世俗性への反省から、

・げにも心のすみるなん後には、なにすぢの人に交わるとても、何か露ばかりのけがれる心侍らん。（五ノ一）とみられる如く、身は俗に置きながらも、澄んだ道心の結果としての遁世の清僧を求める方向に踏み出そうとしている、この『撰集抄』の清僧意識は、その思考方法がひじりという立場を通してのものであるという、法然・親鸞^③とは異なる点に注目すべきものがある。

四 結 語

すなわち、『撰集抄』にみられる清僧意識の表裏をなす清俗両面は、その成立に関わっていたひじりの、ひじりとしての俗的な立場にありながら、清的な面、つまり清澄な道心による遁世の清僧を願い求めた結果によるもので

ある。したがって、二律背反的にみえるその両面は、決して矛盾するものではない。それは、まことに微々たるもので不徹底の感を免れえないが、この俗の身にあつて清澄な信仰心をめざす萌芽は、やがて起ってくる在家仏教への一つの契機をなすものといえよう。

『撰集抄』と同時代の仏教説話集がすべて同様であるとは考えないが、平安末期から鎌倉期にかけて『発心集』や『閑居友』など多くの仏教説話集が続出した背景の一面に、ひ・じ・りといわれる人々が関わっていたこともおそらく事実であろうと思うのであるが、この面からの考察は、本稿ではふれなかった『撰集抄』の文芸的面の考察とともに他日を期したい。

附 遁世の情緒

如上考察し来ったように、『撰集抄』の基調をなすものは清僧意識であるわけだが、この清僧讚美の面を諸先覚は遁世思想ととらえられている。確かに、この清僧意識は遁世を志すものであり、従つて本書は遁世の清僧を讚美しているのであるが、それは極めて感情的な叙述になっており、思想というには程遠いものである。私もかつて、「遁世思想」と題して考察したことがあったが、近頃は、それは遁世思想というよりも遁世の情緒といふべきものであると考えるようになってきている。

本書には、伊藤氏も述べられているように、遁世を教理的に説明するものは全くないといつてよいほどである。

たとえば、遁世僧やその偽悪の行為について、なぜ遁世するのか、なぜ偽悪の行為に走らねばならないかということは述べられていず、ただ讚美し希求しているだけである。また、俗にあって清僧を願ひ求めるにしても、俗に身をおくことを積極的に主張するのではなく、**ひじり**というすでに俗の中にある立場から清僧を求めているにすぎない。

あえて思想的なものを挙げれば、心を澄ますべきであると主張していることであろう。が、心を澄ますための方法として遁世や偽悪の行為をとらえているのではない。そのような行為を目近に見聞して、そのような方法があるのだと知るのみである。しかし、遁世や偽悪の行為についても、教理的面からとらえるはずである。本書はこの面からの説明が欠けており、ただ感情的に讚美し願ひ求めているばかりである。したがって、本書の清僧意識は、**思想**というよりも**情緒**というべきである。

この点については、近く別稿で論ずる予定である。

説話集 (テキスト)	靈異記 (大系本)	法華驗記 (統群類)	今昔・本朝仏法部 (大系本)	発心集 (鴨長明全集)	閑居友 (古典文庫)	撰集抄 (岩波文庫)	総話数	発心譚 (遁世・隱徳譚)	往生譚	往生の証明 証明ある往生 往生の総数
							一一六	一話(〇・九%)	一話(〇・九%)	$\frac{2}{2}$ (一〇〇%)
							一二九	二(一・六)	一六(二・四)	$\frac{73}{86}$ (八四・九)
							四〇一	二三(五・六)	五九(一四・七)	$\frac{79}{109}$ (七二・四)
							一〇六	一九(一七・九) 一一(二〇・四)	一四(二・三)	$\frac{24}{46}$ (五二・二)
							三三	一一(三四・四) 五(一五・六)	八(三五・〇)	$\frac{4}{10}$ (四〇・〇)
							一一一	二五(二〇・七) 二一(一七・四)	六(五・〇)	$\frac{8}{23}$ (三四・八)

注① 田村圓澄「遁世者考」(昭和34年11月刊『日本仏教思想史研究浄土教篇』所収)・伊藤博之「撰集抄における遁世思想」

(昭42年5月刊『仏教文学研究第五集』所収)

② 「清僧」という言葉を使用したことについて若干ふれておきたい。一般的には「聖僧」というべきであろうが、「清僧」は、主に生活面において清く世俗と関わりせず、仏道修行のみに心をかけている僧で、これに対して「聖僧」はそれのみ

でなく、徳もあり学識もある、いわゆる学徳兼備の、あらゆる面において完全無欠の僧と考える。したがって「聖僧」は「清僧」的面も包含していることになる。本書の場合、極めて情緒的な面で僧を讚美しており、しかもその讚美の対象も学徳の面ではない。よって「聖僧」というよりも「清僧」といったほうがふさわしいと考えるわけである。

③

『撰集抄』の引用及び巻数話数は、すべて近衛家陽明文庫旧蔵文を底本とする岩波文庫本による。

④

例えば六ノ二では、後冷泉院崩御・同日女院が亡くなる・同日後三条院即位・六年後、後三条院崩御・まもなく宇治の大相国頼通も死没、といったことを矢継早に挙げ、その間に世の無常の感懐を述べ、最後に弥陀の慈悲を説き称名すべきことを説く。しかも、単なる感想というよりも、読者の感情に訴える色彩が濃い。すなわち、この諸例の人物を知る人に対しては充分に唱導の役目を果しうる文章であるが、さらに、先の諸例の人物をその場にに応じて入れかえれば、その働きは自在である。そのほか、唱導においては雲林院の説法(二ノ五)をはじめ一ノ六・六ノ一などにもうかがえる。

⑤

『梁塵秘抄』にも「聖の住所はどこ／＼ぞ、箕面よ勝尾よ、播磨なる書写の山、出雲の鰯渕や日の御崎、南は熊野の那智とかや。」とみえる。

⑥

同博士著『高野聖』にくわしい。

⑦

『盛衰記』巻四十「又異説に説には、横笛は法輪より帰りて、髪をおろし、双林寺にありけるに、……(中略)……其後、横笛尼、天野に行て入道が袈裟衣をすすぐともいへり。異説まちまち也。」(校註日本文学大系 第十六巻)

⑧

編纂の目的や時代背景等によって説話集の性格も異なり、一概に比較できるものではないし、数字が万能でないことも当然であるが、『撰集抄』の他と異なる性格の一面をうかがうことはできよう。また、これらの項目は極めて主観の入りがやすい点から、その数字も大体の傾向を知る目安にとどめるべきであろう。

⑨

四重興廃の教判とは、「仏一代の教法に四重(昔・迹・本・観)の勝劣興廃をたて、迹門が興れば爾前(法華経説時以前の諸経)の方便教がすたれ、本門が興れば迹門はすたれ、止観(観)が興れば以上の教が廢ると説く。教(昔・迹・本)よりも観を、理論よりも実践を、学解よりも信仰を強調しようとするものである。」(『仏教学序説』三九九頁)。

⑩

『撰集抄』三ノ七では、雲居寺の瞻西上人が化人によって慈悲心をためされる話の後に、本書の作者は「かやうの事などは、世あがりては書き置くと多く見え侍れども、末の世にては例すくなかるべし。」と、靈驗・奇瑞の少なくなっ

ていることを述べている。また『発心集』第八「或武士母怨^シ子頓死^シ事」の後半「雖^ニ末代^ニ不可^レ卑下^一事」では、今も昔も仏の救いのかわらぬ事をのべ、そのちがいは人の側の信によるといっているが、逆説的に考えれば、このようなことをあえていわねばならないところに、かえって今と昔とのちがいがあるという意識をみることができ、靈驗・奇瑞が末世ではありえないことを物語っているといえよう。

- ⑩ ひ・じりという、すでに世俗の中にある立場から道心の清澄さを求めるのに対して、法然・親鸞の、真実の信仰を求めようとして世俗の中へ積極的に身を置いたのとは、身は俗にあって澄んだ道心を求めるという同様のことでありながら、そこに相異なる点を見ることができ。

⑪ 注①の伊藤氏論文参照。

〔附記〕 本稿は、昭和五十年年度仏教文学研究会大会（於 名古屋大学）において口頭発表した原稿に若干の補筆をしたものである。